

エリート教育とは

—第8回教育フォーラムで考える—

開倫塾

塾長 林 明夫

Q：第8回教育フォーラムで講師をしたそうですね。

A：(林明夫：以下省略)

(1)はい。3月15日(金)に東京駅丸の内北口にある日本工業倶楽部で開かれた第8回教育フォーラム(公益社団法人 経済同友会 学校と経営者の交流推進委員会主催)の第2部グループディスカッション「これからの社会で求められる力と教育のあり方」教員チームの講師とコーディネーターをつとめました。(委員長は杉江和男 DIC 会長)。

(2)教育フォーラムの第1部は「失敗しよう、失敗して心の糧にしよう」というテーマでの長島徹 経済同友会副代表幹事、帝人相談役の基調講演で、参加した中学生から多くの活発な質問がありました。

Q：林さんは学校への主張授業によく行っていますね。

A：(1)はい。私は東京の経済同友会の他に群馬・栃木・福島の経済同友会の会員でもありますので、要請に応じて学校や教育委員会に経営者を派遣する取り組みをしている東京と群馬、栃木の経済同友会から派遣されて、学校や教育委員会などで出張授業をしています。

(2)この3月第3週には、東京都多摩市立多摩中学校3年生(3月12日)、栃木県立足利清風高校1年生200名全員(3月13日)、東京都練馬区立開進第四中学校2年生(3月14日)、この第8回教育フォーラム(3月15日)と、1週間に4回も公立学校の中学生や高校生、学校の教員を対象にお話をさせていただきました。

(3)講演では、勉強するのは何のためか、働くのは何のためか、今やっている学校の勉強は上級学校や社会に出てからの仕事・社会的活動、人の一生にとって役に立つのかななどを私の経験や失敗談などを交えてお話しています。

(4)講演が終わると各学校から数日後に感想が送られてきますが、少しはお役に立てているようでうれしい限りです。

(5)この活動を通じて、生徒や先生だけでなく、学校長や教育委員会とも相当な交流があります。また、私は経済同友会の教育改革委員会のメンバーでもありますので、2013年度のテーマである大学改革の調査・研究のために毎月のように文部科学省や大学の関係者と話し合い、大学を訪問・視察させていただいております。

Q : そのような活動の中で、林さんが最近考えることは何ですか。

A : (1)日本におけるエリート教育の不在です。

(2)進学校と言われる多くの高校や中高一貫校では医学部や東京大学等の合格者数を競い合い、目の色を変えながら受験指導をしています。リーダーとは何か、エリートとは何かについての教育を本格的に行っているところはあまりないようです。

(3)また、受け入れ側の東京大学はじめ多くの難関大学でも、リーダーやエリートについての本格的な教育をしているところは数少ないように思えてなりません。

(4)リーダーとは何か、エリートとは何かについて真正面から向き合わずに、ひたすら東京大学等への合格を目指す高校が大半のようです。東京大学に入学しても、東大 EMP(エグゼクティブ・マネジメント・プログラム)のような 40 歳代の社会人向けの 25 名定員の半年コースはあるものの、新入生 3000 名あまりを対象に卒業まで一貫して大学を挙げての取り組みをしているのはあまり多いとは思えません。教員や学生の自主性・自主的な取り組みに委ねているようです。

(5)超少子化、人口減が進む中で、国と地方の債務が GDP の 2 倍以上に膨れ上がっている日本は、国を挙げて取り組まなければならない課題が山のようにあります。このような中、エリート教育の不在は国や国民の運命を危機に陥れます。

Q : 学習塾・予備校・私立学校の経営者、先生方にお伝えしたいことは何ですか。

A : (1)例えば、東京大学等への進学者数を増やしたいのであれば、学年にふさわしいリーダーとは何か、エリートとは何かについての教育を本格的に行うことを提言させていただきたい。

(2)受験指導をしながらそんなことはできないとおっしゃらないで、各教科の中にリーダー教育、エリート教育を入れていただきたく希望します。

(3)例えば、慶應義塾大学附属校や大学の受験希望者の全員には、創始者である福沢諭吉先生の自伝「福翁自伝」は原文で、代表的著作である「学問のすすめ」は口語訳でもよいので必ず読ませるべきです。「文明論の概略」も口語訳が出ていますから、読ませた上で、北岡伸一著「独立自尊—福沢諭吉の挑戦—」(中公文庫)や丸山真男著「文明論の概略を読む」(岩波新書上・中・下)も読むように指導すべきです。慶應義塾大学入学前に創業者である福沢先生の教養を熟知して入学すれば、慶應義塾の 150 年の蓄積を最大活用した充実した大学生活が必ず送れます。

(4)東京大学等に入学を希望する高校生にも、リーダーとして、また、国や社会を支えるエリートとして読んでおくべき古典の読書指導を指導している教科の中に必ず入れ込んでいただきたい。

(5)古文や漢文は、文系・理系を問わず高校時代に本格的に身に付けておかなければ、エリートとは呼べません。日本史、世界史、地理を抜きにしては、グローバル社会ではエリートとして相手にされません。SPSS などのコンピュータのスキルアップには、高校 3 年生までの数学が

欠かせません。地球・環境を考える上で高校の地学の知識は欠かせません。生物、化学、物理は文系の人にこそ必要です。美術や音楽、家庭、保健の高校の教科書レベルプラスアルファの知識はエリートに不可欠です。

(6)高校の「倫理」は、高校のエリート教育の集大成といえます。エリートとしての教養教育の基本中の基本です。学校で教えるところが少ないのであれば、塾・予備校のサブ・テキストとしてでも各教科の中に入れ込むべきです。

Q：最後に一言どうぞ。

A：(1)スペインの哲学者オルティガの「大衆の反逆」を高校時代に読まないエリートは、世界にはあまりいません。

(2)東京大学などの難関大学の医学部に進学したいのなら、森鷗外の「渋江抽斎」を必読書として歯を食いしばって、ノートを取りながら5～6回読ませるべきです。

(3)エリートを目指す高校生にこそ、孔子の教えを弟子たちがまとめた「論語」の全499章と佐藤一斎の「言志四録」(岩波文庫)を何回も読ませ、座右の書とさせるべきです。内村鑑三の「後世への最大遺物、デンマーク国の話」「代表的日本人」こそ、リーダーやエリートを目指す高校生の必読書です。ノブリス・オブリージとは何かを具体的に教えてくれます。

(4)中学生や高校生を教える先生としてなすべきリーダー教育、エリート教育とは、「古典との時空を超えた対話」の大切さを教科の指導の中で体験させることです。

(5)以上のように日本の高校や大学でリーダー教育、エリート教育が欠如しているのであれば、学習塾・予備校・私立学校でこそ受験勉強の内容に組み入れ、先生方の目の前にいる生徒に対して是非行っていただきたく希望します。

(6)ここが出るぞなどという小手先の受験勉強だけでは、リーダーやエリートは育ちません。皆様はどのようにお考えですか。たまには御意見をお聞かせください。

— 2014年3月30日 林明夫 —